

「殿などのおはしまさで後」(枕草子第一三七段) 指導メモ

●本文

(1) 殿などのおはしまさで後、世の中に事出で来、騒がしうなりて、宮も参らせ給はず、小二条殿といふ所におはしますに、何ともなくうたてありしかば、久しう里に居たり。御前わたりのおぼつかなきにこそ、なほ、え絶えてあるまじかりけれ。

(2) 右中将おはして、物語し給ふ。「今日、宮に参りたりつれば、いみじうものこそあはれなりつれ。女房の装束、裳・唐衣折に合ひ、弛まで候ふかな。御簾のそばの開きたりつるより見入れつれば、八、九人ばかり、朽葉の唐衣、薄色の裳に、紫苑・萩など、をかしうて居並みたりつるかな。御前の草のいと繁きを、『などか。かき払はせてこそ。』と言ひつれば、『ことさら露置かせて御覧ずとて。』と、宰相の君の声にていらへつるが、をかしうもおぼえつるかな。『御里居、いと心憂し。かかる所に住ませ給はむほどは、いみじきことありとも、必ず候ふべきものに思しめされたるに、効なく。』と、あまた言ひつる、語り聞かせ奉れとなめりかし。参りて見給へ。あはれなりつる所のさまかな。対の前に植ゑられたりける牡丹などのをかしきこと。」などのたまふ。「いさ、人の憎しと思ひたりしが、また憎くおぼえ侍りしかば。」といらへ聞こゆ。「おいらかにも。」とて笑ひ給ふ。

(3) げにいかならむと思ひ参らす御気色にはあらで、候ふ人たちなどの、「左の大殿方の人、知る筋にてあり。」とて、さし集ひものなど言ふも、下より参る見ては、ふと言ひやみ、放ち出でたる気色なるが、見ならはず憎ければ、「参れ。」など、たびたびある仰せ言をも過ぐして、げに久しくなりにけるを、また、宮の辺には、ただあなた方に言ひなして、虚言なども出で来べし。

(4) 例ならず、仰せ言などもなくて日ごろになれば、心細くてうち眺むるほどに、長女、文を持って来たり。「御前より、宰相の君して、忍びて賜はせたりつる。」と言ひて、ここにてさへ引き忍ぶるもあまりなり。人づての仰せ書きにはあらぬなめりと胸つぶれて、疾く開けたれば、紙にはものも書かせ給はず、山吹の花びらただ一重を包ませ給へり。それに、「言はで思ふぞ。」と書かせ給へる、いみじう、日ごろの絶え間嘆かれつる、皆慰めてうれしきに、長女もうちまもりて、「御前には、いかが、ものの折ごとに思し出で聞こえさせ給ふなるものを。誰も、あやしき御長居とこそ侍るめれ。などかは参らせ給はぬ。」と言ひて、「ここなる所にあからさまにまかりて、参らむ。」と言ひて往ぬる後、御返り言書きて参らせむとするに、この歌の本、さらに忘れてたり。「いとあやし。同じ古言といひながら、知らぬ人やはある。ただここもとにおぼえながら言ひ出でられぬは、いかにぞや。」など言ふを聞きて、前に居たるが、「『下行く水』とこそ申せ。」と言ひたる、などかく忘れつるならむ。これに教へらるるもをかし。

(5) 御返り参らせて、少しほど経て参りたる、いかがと、例よりは慎ましくて、御几帳に端隠れて候ふを、「あれは、今参りか。」など笑はせ給ひて、「憎き歌なれど、この折は言ひつべかりけりとなむ思ふを。おほかた見つけでは、しばしも、えこそなぐまじけれ。」などのたまはせて、変はりたる御気色もなし。(第一三七段)

● 本文分析

- ① 殿などのおはしまさで後、世の中に事出で来、騒がしうなりて、宮も参らせ給はず、小二条殿といふ所におはしますに、
何ともなくうたてありしかば、
(S) 久しう里に居たり。
- ② 御前わたりのおぼつかなきにこそ、なほ、え絶えてあるまじかりけれ。
- ③ 右中將おはして、物語し給ふ。
(右中將の語り・始まり)
- ④ 「(S) 今日、宮に参りたりつれば、
いみじうものこそあはれなりつれ。
- ⑤ 女房の装束、裳・唐衣折に合ひ、(S) 弛まで候ふかな。
- ⑥ (S) 御簾のそばの開きたりつるより見入れつれば、
(S) 八、九人ばかり、朽葉の唐衣、薄色の裳に、紫苑・萩など、をかしうて居並
みたりつるかな。
- ⑦ 御前の草のいと繁きを、
(S) 『などか。かき払はせてこそ。』と言ひつれば、
『ことさら露置かせて御覧ずとて。』と、宰相の君の声にていらへつるが、
(S) をかしうもおぼえつるかな。
- ⑧ 『御里居、いと心憂し。
(S) かかる所に住ませ給はむほどは、いみじきことありとも、必ず(S) 候
ふべきものに(S) 思しめされたるに、
効なく。』
と、あまた言ひつる、(誰ガ 誰ニ) 語り聞かせ奉れとなめりかし。
- ⑨ 参りて見給へ。
- ⑩ あはれなりつる所のさまかな。
- ⑪ 対の前に植ゑられたりける牡丹などのをかしきこと。」などのたまふ。
(右中將の語り・終わり)
- ⑫ (S) 「いさ、人の憎しと思ひたりしが、また憎くおぼえ侍りしかば
(V) 。」といらへ聞こゆ。
- ⑬ (S) 「おいらかにも。」とて笑ひ給ふ。
- ⑭ げにいかならむと思ひ参らする御気色にはあらで、候ふ人たちなどの、
「左の大殿方の人、知る筋にてあり。」とて、さし集ひものなど言ふも、(S) 下
より参る(S) 見ては、ふと言ひやみ、放ち出でたる気色なるが、(S) 見な
らはず憎けれは、
「参れ。」など、たびたびある仰せ言をも(S) 過ぐして、げに久しくなりける
を、
また、宮の辺には、ただあなた方に言ひなして、虚言なども出で来べし。

- ⑮例ならず、仰せ言などもなくて日ごろになれば、
心細くてうち眺むるほどに、**長女**、文を持って来たり。
- ⑯(S) 「**御前**より、**宰相の君**して、忍びて賜はせたりつる。」と言ひて、ここにて
さへひき忍ぶるもあまりなり。
- ⑰人づての仰せ書きにはあらぬなめりと胸つぶれて、疾く開けたれば、
(S) 紙にはものも書かせ給はず、山吹の花びらただ一重を包ませ給へり。
- ⑱それに、「言はで思ふぞ。」と(S) 書かせ給へる、(S) いみじう、日ごろの
絶え間嘆かれつる、皆慰めてうれしき**に**、
長女もうちまもりて、
「**御前**には、いかが、ものの折ごとに思し出で聞こえさせ給ふなるものを。
誰も、あやしき御長居とこそ侍るめれ。
などかは参らせ給はぬ。」と言ひて、
「ここなる所にあからさまにまかりて、参らむ。」と言ひて往ぬる後、御返り言書きて
参らせむとする**に**、
この歌の本、さらに忘れてたり。
- ⑲(S) 「いとあやし。
同じ古言といひながら、知らぬ人やはある。
ただここもとおぼえながら言ひ出でられぬは、いかにぞや。」など言ふを聞きて、**前**
に居たるが、
「『下行く水』とこそ申せ。」と言ひたる、(S) などかく忘れつるならむ。
- ⑳これに教へらるるもをかし。
- ㉑(S) 御返り参らせて、少しほど経て参りたる、いかがと、例よりは慎ましくて、
御几帳に端隠れて候ふ**を**、
(S) 「あれは、今参りか。」など笑はせ給ひて、
「憎き歌なれど、この折は言ひつべかりけりとなむ思ふを。
おほかた見つけでは、しばしも、えこそなぐまじけれ。」などのたまはせて、変はりた
る御気色もなし。

●予習プリント「訳出のポイント」 (教科書のページと行数が示してある)

【一六〇ページ】

- 1 「おはしまさで後」 意味は？
- 2 「うたてありしかば」 意味は？
- 3 「里に居たり」 誰ガ？
- 3 「御前わたり」 意味は？
- 3 「え絶えてあるまじかりけれ」 品詞分解と文法的意味は？
cf 「えこそなぐまじけれ」(一六二ページ9行)
- 5 右中将が清少納言を訪ねた季節は？ その根拠は？
- 5 「宮に参りたりつれば」 「宮」の意味は？

- 6 「弛まで」 意味は？
 7 「御簾のそばの」 用法は？
 7 「見入れつれば」 誰ガ？
 8 「居並みたりつる」 誰ガ？
 9 「かき払はせてこそ」 下にどのような内容が補えるか。
 9 「言ひつれば」 誰ガ？
 9 「御覧ずとて」 誰ガ？ 下にどのような内容が補えるか。
 10 「御里居」 誰ガ？
 11 「住ませ給はむ」 誰ガ？ 「む」の文法的意味は？
 12 「必ず候ふべき」 誰ガ？
 12 「思しめされたる」 誰ガ？
 12 「あまた言ひつる」 「あまた」とは？
 12 「語り聞かせ奉れ」 誰ガ、誰ニ、どのようなことをか？
 13 「参りて見給へ」 敬語は？ 誰に対する敬意か？

【一六一ページ】

- 2 「いらへ聞こゆ」 誰ガ？
 2 「おひらかにも」 意味は？
 3 「笑ひ給ふ」 誰ガ？
 4 「げにいかならむと思ひ参らする御気色」 誰ガ「思ひ参らする」、誰ノ「気色」か？
 4 「左の大殿方の人」 誰ガ？
 5 「下より参る見ては」 「参る」は誰ガ？ 「見ては」は誰ガ？
 6 「放ち出でたる」 誰ガ、誰ヲ？
 6 「仰せ言」 誰ノ？
 6 「仰せ言をも過ぐして」 具体的には、誰ガ、どうしているのか？
 10 「宰相の君して」 意味は？
 11 「ここ」 どこ？
 11 「人づての仰せ書きにはあらぬなめり」 では、どういうものだということのか？
 13 「いみじう」 どこに掛かるか？
 14 「嘆かれつる」 品詞分解と文法的意味は？
 14 「慰めて」 「慰む」の活用の種類は？
 15 長女の発言では、敬語の使われ方にどのような特色があるか？
 15 「思し出で聞こえさせ給ふなるものを」 敬語とその敬意は？ 「なる」の文法的意味は？
 16 「あやしき御長居」 誰ノ、どのような状態か？

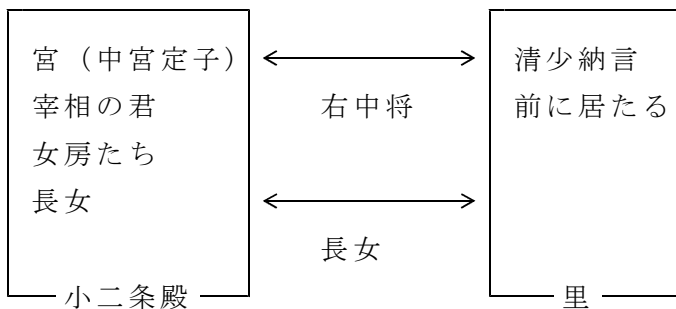
【一六二ページ】

- 1 「ここなる」 「なる」の文法的意味は？
 1 「参らむ」 長女が後に再び清少納言の家に「参」るのはなぜか？
 2 「歌の本」 「本」に対応する語は？
 2 「さらに～打消」 意味は？
 3 「知らぬ人やはある」 「やは」の文法的意味は？

- 3 「言ひ出でられぬ」 品詞分解と文法的意味は？
- 6 「参りたる」 誰ガ、どこへ？
- 7 「端隠れて候ふ」 誰ガ？
- 7 「笑はせ給ひて」 誰ガ？
- 8 「言ひつべけりけり」 品詞分解と文法的意味は？
- 8 「おほかた～打消」 意味は？

●展開1 第一段落

- Q 1 第一段落を読んで、場所と登場人物を整理する。
(第二・四段落の登場人物分も含め図解する)



- Q 2 なぜ宮は小二条殿にいるのか、抜き出しなさい。
→「世の中に事出て来、騒がしうなりて」
* 枕草子関係年表を使って背景を説明する。
二条北の宮から小二条殿への移動は放火の可能性のあることに触れる。
* 花山院事件について、齊信が道長に報告したことに触れておく。
(参考) 山本淳子『枕草子のたくらみ』(朝日選書、2017)
- Q 3 一方、なぜ清少納言は里にいるのか、抜き出しなさい。
→「何ともなくうたてありしかば」
* 重要語「うたてあり」
- Q 4 第一段落を現代語訳する。
* 現代語訳をする際のポイントについては、「●予習プリント (訳出のポイント)」参照。

●展開2 第二段落

- Q 1 登場人物を補足する。
- Q 2 清少納言が里にいる理由を抜き出しなさい。(ヒント：第二段落で清少納言の発言部分は？)
→「いさ、人の憎しと～侍りしかば」
* 重要語「憎し」 (枕草子「にくきもの」の内容を簡単に紹介)
女房たちが清少納言を気に入らないと思った理由が今後種明かしされる。
- Q 3 女房たちは、どのような態度で中宮に仕えているか、抜き出しなさい。

→「弛まで」

Q 4 それが具体的にはどういう面にあらわれているか。

→装束

Q 5 「折に合ひ」とあるが、「折」を考えるヒントは何か。また、いつか。

→紫苑・萩 秋

*装束の説明

*中宮を訪れる人は多そうか？ にも関わらず正装をしている。

Q 6 「弛まで」仕えているという表現と矛盾する事態は何か？

→「御簾のそばの開きたりつる」

*寝殿造りの構造復習

*わざと道長方の右中將に「弛ま」ない姿を見せたのであろう。

*右中將の人物像の説明。

・清少納言の里を知っている→仲が良い。

・枕草子の流布のきっかけをつくる。

Q 7 第二段落を現代語訳する。

*「などか、かき払はせてこそ」の発言から、配慮に欠ける部分のある右中將の人物像を確認する。

Q 8 「牡丹」の季節は？

→春（4～5月）

*「寒牡丹（二期咲き）」などの説もあるが、経房の単なる間違いでは？

Q 9 「おいらかにも」は①おっとりしている、穏やかだ ②率直だ のどちら？

→「率直ですね（あっさり言いますね）」くらいの意。

●展開3 第三段落

Q 1 女房たちの清少納言をどう見ていたか、抜き出しなさい。

→「左の大殿方の人、知る筋にてあり」

Q 2 「左の大殿方の人」と同じ内容の語句を抜き出しなさい。

→「あなた方」

*つまり敵。

*背景説明（道長方にトラバユする可能性を疑われた）

Q 3 「虚言」とはどういったことと想像されるか。

→年俸1億円

●展開4 第四・五段落

Q 1 新しい登場人物を二人抜き出しなさい。

Q 2 季節を考えるヒントになる語句を抜き出しなさい。また、季節はいつか。

→山吹 春

*「日ごろになれば」とあるが「月ごろ」がふさわしい。

*なんで「仰せ言」がなくなったのか、後に分かるので注意する。

Q 3 手紙を届けた「長女」の態度を表す部分を抜き出しなさい。

→「ここにてさへひき忍ぶる」

Q 4 それはなぜだと思われるか。

→中宮直々の密命を受けたから。

Q 5 それを見た清少納言の反応が分かる語を一文節で抜き出さない。

→「胸つぶれて」

*「人づての仰せ書きにはあらぬ」「宰相の君」について説明する。

Q 6 手紙を読んだ清少納言の気持ちを表す語を一文節で抜き出さない。

→「うれしきに」

Q 7 「人づての仰せ書き」ではない（直筆か）と思った手紙に、何も書かれていなかったにも関わらず「うれしい」理由を分析する。

Q 8 「山吹の花びらただ一重」の意味は？

→散り残らなむ（内容については脚注参照）

*「なむ」の識別

Q 9 「春の名残に」とあるが、この「春」の抽象的な意味は何か？（中宮はどのような意味を込めたのか？）

→「殿などのおはしまし」た華やかな時代。

Q 10 花びらに書かれた「言はで思ふぞ」は、誰が誰をか。

→中宮が清少納言を。

Q 11 「言はで思ふぞ」は、この段落のどこに対応するか？

→「例ならず、仰せ言などもなくて日ごろになれば」

Q 12 「御前には、いかが～給ふなるものを。」の敬語を抜き出して、敬意の方向を考えなさい。また、この部分の敬語の使われ方で何か気がつくことはあるか。

→ソ+ソ+ソ 二重敬語ソ+ソの原則違反

ソ+ケ 方面への敬語ケ+ソの原則違反

*ミッションを依頼されたこともあり、長女は中宮に過剰に反応している。

*それほどの身分差があるから「なる」は伝聞。（文脈と古典常識で判断）

Q 13 「ここなる所に～参らむ」で、①「なる」の文法的意味は？ ②ペアで理解すべき語はどれとどれか。

→存在 「参る・まかる（まかづ）」

Q 14 第四・五段落を現代語訳する。

Q 15 「憎き歌」なのはなぜだと思うか？

→清少納言に自分の思いを届ける大切な歌だから、誰もが知っている歌ではなく、二人だけがわかり合えるような歌にしたかったという思いがあるのではないか。

●まとめ

Q 16 歌を忘れた清少納言の姿から思い浮かぶものは？

→「古今の草子を」で下の句が答えられなかった女房たち。

*中宮からの直接の下問には、誰でも緊張する。

Q 17 久しぶりの中宮の前に参上して、几帳に隠れている姿から思い浮かぶものは？

→「宮に初めて」の清少納言の姿。

Q 18 中宮は「変はりたる御気色もなし」であったが、他の女房はどうだったと想像されるか？

→この里居の時期に枕草子の一部が書かれたことが想定されており、それを他の女房たちが読むことで、清少納言の中宮に対する思いを理解し、以前と同じように受け入れたと思われる。

* 「跋文」 第一段落 ここで書かれている「里居」がこの記事の事だと思われる。

* 「跋文」 第二段落 この時の「紙」が使われた。

* 一条帝 漢文 「史記」

中宮 和文（和歌） 「四季」

（だから、序段が「春はあけぼの～夏は～秋は～冬は～」なのである）